

学ぶとは

たゆまない学習と努力

『習うは一生。仕事には、たゆまない努力の裏付けが必要である。これで十分というものはない。我々の経営環境は、常に変化しており、変化への対応ができなくなった時、専門家としては引退すべき時である。』

この文は、約10年前、弊社の行動指針の第1条として設定したものである。私が、32歳で公認会計士として独立し、3年がたったころである。当時、事務所の職員は約7人、現在は、約300人なので、本当に会社立上げの小さなころである。

たゆまない学習、努力の必要性は、自分に対する戒めの言葉でもある。独立した私にとって、定年はない。しかし、引退すべきときはある。もし、私が開業している外科医であり、執刀医であるとしよう。開業医にとっても定年はない。しかし、年齢とともに体力は衰え、視力も悪くなる。学習を続けないうかぎり、最新の技術も身に付けることはできない。たとえ、努力を続けたとしても、患者のために引退すべきときは必ずくる。それを決めるのは、自分自身でしかない。

実際、私は、患者の命を預かるほどの仕事はしていない。しかし、私が継続的学習を怠れば、顧客に与える損害は計り知れない。もし、私が、モチベーションを落とし、事業意欲を失ったら、それは1人のプロフェッショナルとして引退すべきときなのである。

独立した私にとって、上司は存在しない。何の制約もない自由は、墮落への落とし穴でもある。プロフェッショナルとして生きる意味を10年前に、自分自身に問いかけ、これを10カ条にまとめ、弊社のク

レドカードにしたのである。

継続的学習が困難なのは、ほかにも理由がある。これは、「無知の知」を知ることの難しさである。人間には、自分の知らないことを学習しようとする意志はある。しかし、この意志は、知ったと思ったとたんに消えうせてしまう。「自分は、もう知っている。十分に学んできた」といった感覚に、とかく、陥りやすくなるものである。

私は、これを避けるために、自分の知らないことは何かを常に自分自身に問いかけるようにしている。これは、決して、自分自身の専門分野だけのことではない。経営、歴史、リーダーシップ、いわゆる人間学を学ぶことが重要である。専門家は、とすれば、専門馬鹿になってしまうからである。

日本には、心技体という言葉がある。力士になる人間は、子どものころから身体も大きく、けんかも強い。このとき、勝つためには、身体が第一という価値形成がされる。さらに、柔道等を習い、技を磨けばさらに強くなる。このとき、身体の次に、技が重要という価値観が変わる。アマチュア時代は、これでもよい。しかし、プロになったとき、全国から身体も技も研ぎ澄まされた同士の戦いとなり、このとき、初めて精神力が真の強さを決めることに気づくのである。

プロフェッショナルとは、自分の知識、技術、経験だけでは決してなれるものではない。最後は、哲学・価値観が重要となる。これを磨くための人間学の習得こそ、われわれが最も重視しなければならない分野なのである。

結局、それぞれの分野で成功している人を研究すると、生き方を学ぶ重要性に気づくのである。

プロフィール



久野康成公認会計士事務所 所長
公認会計士・税理士

久野 康成
(くの・やすなり)

1965年生まれ。滋賀大学卒業後、青山監査法人入所。1998年久野康成公認会計士事務所を設立。現在、東京、横浜、名古屋、大阪、インドにて事業展開。社員総数300人。著書に「できる若者は3年で辞める」(出版文化社)、「あなたの会社を永続させる方法」(あさ出版)ほか。